

医療系大学における理学療法学専攻学生の職業適性

○内田賢一、鶴見隆正、菅原憲一

神奈川県立保健福祉大学リハビリテーション学科 理学療法学専攻

【はじめに】本邦において理学療法士の4年制大学における養成教育が始まって10余年が経過したが、近年目的意識の乏しい学生が入学してきていることが指摘されている。理学療法学専攻（理学療法学科などの名称も含めて）は理学療法士という職業人養成が第一目的であるため、基本的には理学療法士としての職業適性を備えている学生が入学してくると考えられるが、入学選抜試験の時点で学生の職業適性を判断することは難しく、入学後に調査をすることが現実的である。しかし、看護学生を対象とした職業適性の研究は数編認められるが、理学療法士を目指す学生を対象とした先行研究は認められない。

入学した学生の職業意識を調査することは、理学療法士として求められる適性がどの程度あるのか、また不足している適性は何かを教員が把握することが可能となる。また、臨床実習に出たときにどのようなことが問題として表出する可能性があるのかを入学した時点で予め見極められると考えられ、卒業までの4年間の教育の中で学生に身に付けさせたい事柄を明確にすることが出来ると考えられる。

職業適性を検査する方法の一つに、1985年に日本労働研究機構（現 独立行政法人 労働政策研究・研修機構）より公表された、大学生を対象とするVPI（Vocational Preference Inventory）職業興味検査（以下、本検査）がある。本検査は、160の具体的な職業に対する興味・関心の有無を回答させることにより、6種の興味領域尺度（R：現実的、I：研究的、A：芸術的、S：社会的、E：企業的、C：慣習的）に対する個人の興味・関心の高さを測定するとともに、あわせて個人の5種の心理傾向尺度（Co：自己統制傾向、Mf：男性女性傾向、St：地位志向傾向、Inf：稀有反応傾向、Ac：黙従反応傾向）について把握しようとするものである。本検査の原版は、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学名誉教授のジョン L. ホランド（John L.Holland）によって開発されたVPI（初版1953年、その後7回改訂）の1978年版であり、アメリカでは大学生の進路指導用の検査として広く利用されている。本検査は、この原版を日本向きに翻案したものであり、ホランドの理論の日本人への適用性をはじめ、さまざまな基礎的研究が行われている信頼ある検査法であり、日本の大学生等に対する進路指導や職業ガイダンスのツールとして広く利用されているものである。

本検査では規定の方法で算出したパーセンタイル順位というものを使用する。被験者の職業興味は、上記6種の興味領域尺度のパーセンタイル順位を高いものから順に3つの記号を並べて興味パターンとし、そのパターンによって推奨される職業例が決まってくる。例えば、EASであれば弁護士やレポーター、CISでは経理事務員や税理士などが推奨される。また、RIAは歯科技工士や建築士が推奨されるが、組み違いのIARでは天文学研究者や科学研究者が推奨されるなど、組み合わせによって推奨される職業名が違っても本検査の特徴の一つである。なお、本検査において理学療法士が推奨される職業興味パターンはSIRと定められている。

本研究では、筆者らが所属する大学の理学療法学専攻に入学した学生を対象にVPI職業興味検査を行い、入学時の学生に理学療法士として要求される職業適性がどの程度あるのかを明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】平成15年4月に当大学理学療法学専攻に入学した20名（以下1期生）、および平成16年4月に入学した21名の学生（以下2期生）に対し、本調査の趣旨を説明し賛同を得た全学生を対象とした。検査日時は、1期生は平成15年10月1日、2期生は平成16年10月1日に行った。学生の内訳は、1期生は男子学生11名、女子学生9名、平均年齢 19.6 ± 2.7 歳（18～30）、入学選抜試験の受験方法は一般選抜10名、特別選抜10名（推薦8名、帰国生徒1名、社会人1名）であった。2期生は、男子学生7名、女子学生14名、平均年齢 19.6 ± 2.4 歳（18～26）、入学選抜試験の受験方法は一般選抜10名、特別選抜11名（推薦9名、社会人1名、留学生1名）であった。

得られたデータは、規定のパーセンタイル順位に換算して専攻全体の傾向を算出するとともに、一般選抜群と推薦選抜群の2群に分類し、各興味領域尺度をMann-WhitneyのU検定を用いて比較検討した。統計処理にはSPSS 12.0J for Windowsを使用し、有意水準は5%未満とした。

なお、今回傾向尺度も算出したが、傾向尺度は学生個々人の心理的傾向を判断するものであり専攻全体としてまとめることが困難なため、本報告では分析は行わないこととした。

【結果】1期生20名全学生個々の学生のパターンはバラバラであるが、専攻全体の平均は、パーセンタイル順位の高いものからS：54.3%、R：53.9%、I：51.3%、A：49.8%、E：37.6%、C：31.8%であり、パターンはSRIとなった。2期生21名の全学生も、1期生同様に個々の学生のパターンはバラバラであるが、専攻全体の平均はパーセンタイル順位の高いものからR：61.8%、S：60.1%、I：56.2%、A：49.5%、E：37.9%、C：37.4%であり、パターンはRSIとなった。1期生同様に理学療法士に必要な3尺度は揃っているものの、Rが最高値を示していた。

一般と推薦の選抜別に見たパターンは、一般選抜群の学生では1期生はAIS、2期生はSRIパターンを示し、一方の推薦選抜群の学生では1期生はRSC、2期生はSRIパターンを示した。

【考察】今回の検査において、専攻全体では理学療法士として推奨されているSIRパターンの興味領域の順位が異なっていたので、専攻全体としては相対的に理学療法士に準じている集団であると考えられた。しかし、1期生は選抜群によって差が認められたことより、今後はRが不足していた一般選抜の学生には現実的興味を持たせる教育を、Iが不足していた推薦選抜の学生には研究的な興味を持たせる教育が必要であると考えられた。2期生に関しては選抜群間で差は認められなかったが、RとIが理学療法士の推奨パターンの組違いであることより、より研究的興味を高める教育が必要であると考えられた。今回の1期生と2期生の選抜別のVPIの結果より、研究的興味はIおよび現実的興味はRが、当大学における理学療法士養成教育の重要なポイントであることが考えられた。しかし、VPIにおいて専攻全体では理学療法士に必要な3要素が揃っていたことより、学生自身が自分に足りない思考過程や興味に仲間を介して気が付く場として、学生同士での討論を重ねる演習を多く取り入れることも、今後の教育方法の一つであると考えられた。